



あとがき



新型コロナは一人一人に様々な影響を与えています。私は今年度前期の担当講義（茨城大学、津田塾大学）はともにオンライン授業となりました。結局キャンパスに入ることなく、また学生の顔を見ないままの講義となりました。本来であれば核図表を配布し、また3次元核図表を教室に持って行って原子核の解説での演示をするなどをしていたのですが、それらができず、代わりに演示動画（例えば3色レーザーの2重スリット実験（波長の違いと光の横波の演示）など）を作成したり、その他いくつか準備に追われた半年でした。オンラインツール（Microsoft Teams, Google Classroom）は最初戸惑いましたが、簡単なクイズ（quiz）が設定でき、毎週のフィードバックが効率的にできた面もあり、いろいろ発見もありました。研究の現場ではzoomが当たり前になり、一年前では想像もつかないほどのオンライン化が進んでいることに不思議な思いになります。しかし自宅待機の仕事を経験し、効率的に仕事を行うということを意識的に考えるようにもなるなど、自分を見つめ直すきっかけにもなっています。秋になり対面授業が増えつつありますが、この流れはこのまましばらく続くのでしょうか、早く人の往来が自由になる環境になることを願っています。

自粛の影響は核図表作成にも及びました。本号の記事にあるように核図表2018の日本語化および高校への配布のプロジェクトをクラウドファンディングで行う予定でしたが、ファンディング成立後の作業が遅れて、当初の9月完成・配布の予定が12月完成・配布（予定）となってしまいました。プロジェクトの一つである出張講義も行いたいところですが、この状況の中、なかなか難しいところがあります。関係者にはご迷惑をおかけしますが、ご理解いただければと思います。また今後の核図表の一般への普及活動にご期待いただければと思います。

小浦 寛之 2020年10月

日本原子力学会核データ部会

核データニュース編集小委員会

岩本 修（原子力機構）

宇根崎 博信（委員長、京大）

大塚 直彦（IAEA）

金 政浩（九大）

小浦 寛之（原子力機構）

中村 詔司（原子力機構）

山野 直樹（RADONet）

横山 賢治（原子力機構）